
目に見えない贈りもの

藤夜 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目に見えない贈りもの

【Nコード】

N1195J

【作者名】

藤夜 要

【あらすじ】

子はカスガイ・その1／／ギフト企画2009参加作品です。

Boys Santa Claus

僕は知っている。本当はサンタクロースなんかいないんだ、っていうことを。

僕は知っている。サンタクロースの正体が、本当はパパなんだ、っていうことを。

三年前、まだ僕が一年生するとき。パパとママは別々に住むことになった、とパパが電話で僕に言った。せっかく新しい家へ引っ越したばかりだったのに。せっかく理女りおんが、初めて「パパ」「ママ」「にいに」って呼んでくれるようになったばかりだったのに。パパはそれから本当に帰っては来なかった。

なんでか、なんてわからない。僕と理女とママはそれからあとも、ずっと一緒。だけどパパだけがひとりぼっち、なんだって。その理由もわからない。

ただひとつだけわかったことは。

その年のクリスマスから、サンタさんが僕のおねがいたものとは違うプレゼントをくれるようになった、つまりサンタに僕のおねがいがわからなくなっちゃった、ってこと。

ざわざわしているこのごろの教室。話の中身は、クリスマスプレゼントのことでもいいだ。

「なあ、香椎。もうサンタさんにプレゼントは頼んだのか？」

秋人がいじわるな笑いを浮かべて、わざと僕に訊いて来た。

知っているくせに。去年さんざん僕が文句を言ってたのを聞いてたくせに。本当は仮面ライダー電王のベルトが欲しかったのに、ラジコンなんかだったんだ。ラジコンが欲しかった秋人は、

『いらないなら俺がもらう』

と言って、僕からそれを取り上げた。

「別に。どうせサンタなんていないし」

やつから目をそらしてランドセルを机に置く。おとしなんてプレゼント自体がなかったことまで思い出して、何だか気分がもつとずっと重くなってしまった。

「えー、お前知らねーの？ 映画でも言ってたぜ。信じる子供のところにはかサンタさんは来ないんだぜ。今年もまたドボンなプレゼントなんじゃねえの」

秋人のやつ……すごい、ムカつく。

「うっさいなあ。サンタサンタって四年にもなっていていつまでもガキみたいに。聞いているこつちが恥ずかしいだろ」

『サンタはいない派』の石山が言ってた言葉をまねて言い返してやった。

「あんだと?! ガキとかガキが言ってるし」

お前にガキとか言われるほど、僕はぜんぜんガキじゃないし。

「サンタの正体って父親なんだぞ。そんなことも知らないのかよ」
ランドセルの中身を机の本箱へ片づけ、ランドセルを背負いがてらあごをくいと上げる。秋人を見下ろすポーズを取ってから言っちゃった。

「考えてみなよ。子供が世界に何十万人いると思ってんだ。じいさんひとりがひと晩で配達、とかありっこないことだろ。四年生にもなったら気がつけよ」

「んだとコラァ!」

秋人の右ストレートが僕の頬へ思い切り入る。空手をやってる奴のパンチは、僕に目の前で踊る星を見せた。

「おー、ケンカか?」

「秋人と夢人むうとかあ」

「ジャイアン対出来杉の対決みてえ」

「ってか、めずらししくね? 香椎がケンカって」

周囲に男子が集まって来る。

「人ばかにしやがって。お前んちはビンボウだからサンタさんに見

ててもらう為のカメラとか置いてないんだろ！」

秋人がころんだ僕の上にまたがった。

「誰が貧乏だ！ 新築だ、家は！」

奴のお尻をひざ小僧でけり飛ばす。

「いって……っ。くそっ、お前なんか、家代の所為でいっつも地味な服しか買ってもらえてないじゃねえか」

痛くて僕の上からどいた秋人がまた腹の立つことを言い返して来た。

「マ……お母さんが大人っぽい服が好きで買って来るだけだっ」

「どーでもいいし。俺関係ないし」

もう我慢出来ない。やり返してやろうとしてグーを振り上げた瞬間、ほかの男子達にとめられた。

「おい、もうやめとけて。先生に見つかっちゃう」

「ってか、お前ら何の話してんだよ」

会話があっちこっちへ変わっていく。ほかの男子達が口づたえで最初の原因を聞きかじる。

「サンタはいるんだぜ」

「えー、いないって家の兄ちゃんが言ってたよ」

「違うって。サンタってのはいい子供のところしか来ないから、来なかった家の親が自分の子どもひいきして、無理してプレゼント置いてやるんだって」

「あ、だから家は父さんが枕もとにいたんだ」

「え、見たの？」

「見たみた。今年はサンタへ手紙を出し忘れて、とか言い訳してた」「うっそ！」

「え、でも俺んち、サンタからメッセージが届いたぜ？ フィンランドから、ホンモノ」

「マジい?! しょうこは？」

「お、じゃあ今日、家へ来いよ。見せてやるよ。子供ナンバーってのも入ってるんだぜ」

「えーでもさ。俺は兄ちゃんから聞いたからサンタなんて信じないけどなあ。『サンタがママにキスをした』って歌、あれはお父さんを指してるんだぜ。CD聴いたもん。いない、がホントのどこじゃねえの?」

サンタ、サンタ、サンタ、サンタ――。

「うるさいんだよ……サンタサンタって、いちいち」

「ああ?」

サンタなんか、本当はいない。

「もらえるだけいいだろ……」

サンタの正体は、パパだ。

「おい、止める夢人!」

はっとした時には、もう秋人をなぐり返していた。パパやママに、『絶対しちやいけない』
って言われていたのに。

――やり返したら、人間として負けだ。なぐり返すんじゃなく、正しいことを教えてやれ。

一年ずっと、サンタさんは夢人のおこないを、心の目で見てるから。

お腹が冷えて、ずん、と重くなった。秋人をなぐった。人に痛いことをしてしまった。

――僕はとうとう、“悪い子”になってしまった。

自分の部屋へ帰ると着替えもしないでベッドへもぐりこんだ。理女はまだ保育園から帰ってない。学校でケンカをしてしまったから、友達とも遊べない。よけいなことを考えなくて済む遊びが、見つからない……。

パパがいなくなってから、初めて落ち込んだ。パパがいらないこと、
つていうのを別にした“初めて”、つていうことだけど。

少ししてからママが仕事を早引けして帰って来た。

「夢人……ちよっと、いい？」

「……」

「サンタさんのことで、喧嘩になっちゃったんですってね」

「サンタの話なんか、今したくない！ ほっといて！」

「夢人」

「ママ、ごめんなさい。でも、ちよっとだけひとりにして」

「あのね、ママね」

「おねがいっ。ひとりにしてっ」

「……お夕飯になったら呼ぶから、その時にはいらっしゃいね」

「……」

「夢人が話せる気分になるの、待ってるわね」

心の中で、ママに何度もゴメンナサイ、って謝るけれど。でもど
こか自分だけが悪いんじゃないって思ってしまう。やっぱり僕は“
悪い子”なのかな、と思うとまた涙が出て来ってしまう。

ママがあれこれ聞いて来るのは、僕の心配をしてそうしちゃうん
だって、わかってる。でも今の僕は、何も言わなくてもわかってく
れるパパと話がしたいんだ。

サンタさんって本当はパパなんでしょう、とか。

なんで僕の欲しいものをいつも知ってるの、とか。

どうしておとしはプレゼントをくれなかったの、とか。

去年、急にラジコンになっちゃってつまんなかったんだ、って文
句とか。

でも一番に言いたいののは。

「パパ……なんで帰って来なくなっちゃったの？」

ママは「その内帰って来るわよ」って言ったのに。

「ねえ、パパ。親がサンタさんへの伝言係って、本当？」

パパがサンタさんに、僕が悪い子になっちゃったんだ、って言ったの？

だからサンタさんは、おとし来てくれなかったの？

じゃあ、去年はどうして来てくれたの？

「わかんない……」

だれの話を感じたらしいのか、何が本当のことなのか。

そんなことを考えながら、僕はいつの間にか眠ってた。

ママには叱られなかった。学校で先生に叱っていただいたから、ママから言うことは何にもない、って。

ただ、ひとつだけきかれた。

「理女はサンタさんを信じているから見えているわよ。もしかしたら、夢人はサンタさんを信じてないの？」

黙ってこくりとうなずくと、ママは「そう」って、それだけ言うてご飯の用意をし始めた。

ママ、ごめん。仕事を早帰りさせちゃって。僕の所為で先生に謝らせちゃって。

そう思ったから、理女のわがママをいっぱい聞いて、いいお兄ちゃんをがんばった。

半分信じちゃいないけど、もしかしたらサンタさんが来てくれるかも、なんて。そんなことを考える僕は、やっぱり“悪い子”なのかも知れない。

二十五日の朝。

僕はサンタなんかいないってことを、いやってくらいに思い知らされた。

理女の枕元にはプレゼントがあるのに、僕の枕元にはそれがなかった。ママには黙っていた。ママにまで“悪い子”と思われたくな

かったから。

「やだ、夢人。三十九度も熱がある」

ママは会社で電話を掛けようとしてたけど、僕が電話の受話器を取り上げたんだ。

「おととい早帰りさせちゃったばかりだから、僕、ひとりでちゃんと留守番しとく」

ママの細い一直線な目が二倍に開く。

「な……に子供の癖に気を遣ってるのよ。ママなんだから、そんなの当たり前でしょ」

「でも、大丈夫。カッコ悪いじゃん。学童に通ってたとき、秀摩や村田とかも、お母さんが仕事から帰って来てから病院へ行ってたよ」
もう四年生だもん。だいじょうぶ。

「……本当に？」

「うん」

それに僕は理女のお兄ちゃんだしね、と笑って見せると、ママは「年末は忙しいから、夢人が頼りになって助かるわ。何かあったらおばあちゃんにすぐ連絡しなさいね。おばあちゃんのお勤め先は、すぐ抜け出せるところだから」

とおばあちゃんの仕事場の電話番号を書いたメモを置いて出かけて行った。

変なの。一人になってしばらくしたら、熱が三十七度まで下がっていた。

「たいくつ」

でも、起きているといろんなものが動いちゃう。ママはそういうのチェックがすつごくきびしい。ちゃんと寝てなかった、って怒られるのがいやだったから、ベッドの中で頭からふとんをかぶった感じでこっそりゲームをやっていた。

——ガタン。

びくん、と思わず肩をゆらしてしまった。

(ど、どろぼう……?)

でも、こんな子供の部屋にどろぼうなんて入るのかな。

カラカラと静かにサッシの開く音。

「よいしょ」

なんだ、この変な高い声。

「え……、なんでいるんだ？」

「……ぷっ」

しまった！ 変な声が面白過ぎて、笑っちゃったよ、ばれちゃったよ！

「夢人……クン、かな？」

「え？」

ふとんのすきまからベッドの外をのぞいてみたら、真っ赤な色が目に入った。

「うそ！ マジ?!」

思わずがばっと飛び起きてしまう。だって、そりゃそうだよ。

「ご、ごめんね。昨夜はプレゼントが間に合わなくて」

マジックボイスみたいな変な声の人は、サンタの恰好をしてはいるけど、意外と若いおじさんっぽかった。

「ホンモノ？」

「もちろん。知らないのかい？」

——サンタってのは、人の名前じゃなくて、愛あるこの仕事の職種名なんだよ。

「サンタってのはね、本当の発音はセイント、というんだ。聖なる使いという意味で、その下に名前が」

「ん。もういいです」

この長い長い解説好きのところ、ものすごく僕の知ってる誰かさ

んに似てる。

「あ、ごめんごめん。はい、これ」

そう言って手渡されたのは、アメリカにも日本にもある思い切り有名なおもちゃメーカーの包装紙に包まれた大きな箱のプレゼントだった。ちよつと、ううん、かなりドキドキする。もしかして、もしかすると――。

「ママに、いただいたものをその場で開けるのは失礼だからいけません、って言われてるんです。でも僕、サンタさんの前で見たいです。開けたら僕は、“悪い子”ですか」

黒ぶちメガネの向こうの瞳がにんまりと笑っていたから、いいんだろう。口ひげがゆさゆさ揺れている。だからきつといいんだろう。笑ってこくりとしてくれたから、僕は“悪い子”じゃあ、ないんだ、きつと。

がさがさと包みを開ける。ママにばれるとマズいから、こつそりベッドの下へ先にそれを隠した。

「わ……あ、やったあ!!」

もうテレビは終わってしまったけれど、僕が今でも大好きなヒーロー。

「電王ベルト、欲しかったんだ! サンタさん! ありがとう!」
思わず僕は抱きついた。

「よかった、よかった。喜んでもらえて。ん? ちよつと熱があるようだな」

心配そうに僕を見てくれる。それは昔ママがよく読んでくれた、そして今は理女のものになった、フィンランドに住むサンタさんの一日を語る童話のさし絵になってた緑の服を着たサンタさんとそっくりだった。

「ちよつと、熱が出ちゃって。でも、朝よりすごく下がったんだ」

「ママはどうしたんだい?」

「おととい僕がお仕事を早帰りさせちゃったから、ママに仕事へ行って、って僕がおねがいしたんだ」

そうか、とだけ言って僕の頭をなでる、その手の大きさがなつかしくって。

「サンタさん、どうして変な声なの？」

「ん？ あ、いやこれはだね。ほら、高い空を飛びまわっているだろう？ 空の上の方には、ヘリウムガスが多いんだ。それに喉をやられてしまってるねえ」

「サンタさん、僕まだ四年生。ヘリウムなんてわかんない」

「う、あ、そ、そうか」

「うそ。知ってるよ。マジックボイスの缶に説明書きがあったの、見たことがあるもん」

サンタさんの目をじっと見つめる。うろろう、おろおろした感じで視線があちこちへ泳いでる。

「頭のいい子だね、夢人、クンは。それじゃ」

と慌てて窓へ片足をかけて逃げる気まんまんの姿勢を見せた。

そんなサンタさんへ声を掛ける。

「サンタさん、そりは？ どこ？ 僕、見たい」

逃げる後ろ姿が一瞬人形みたいに止まる。

「……トナカイに時間外労働はゴメンだ、と帰られてしまったね。見せてあげられなくて残念だ」

そう言って慌てて窓から外へ飛び出した。

「あ、待って！」

「夢人、クン。大丈夫。俺も子供のころはよく熱を出したよ。悩みごとがあるたんびにね。でも下がって来たなら、悩みも消えて来たっていう証拠だ。今日の遅刻は、ママに内緒にしておいてくれよ！」
一気にそれだけ言うと、僕のサンタは生垣に隠され見えなくなってしまった。

少しして、派手に響く自動車の音。古くてエンジンの音がうるさい、解りやすい車の音。

「仕事をさぼって来たのかな」

すごく嬉しかったけれど、さぼらせてしまったのだとしたら……。

そう思うと、少しだけ「ごめんね」とも思った。

何も言わなくても解ってくれる。僕のサンタさんは、やっぱりいたんだ。

――夢人はサンタさんを信じてないの？

おとといママが見せた悲しい顔を思い出す。

「ママ、ありがとう。ごめんね」

僕はやっぱり、サンタさんはいる、と信じることにした。

学校が終わって宿題と連絡メモを届けてくれた将司が

「秋人がごめん、って言いたいんだってさ」

と言って、曲がり角の方へ向かって手招きをした。

「なぐったせいで熱出したのかな、とか、さ……その……ごめん」

何か、そういうの、どうでもよくなった。

「僕もなぐってごめん。ね、僕もう熱下がったんだ。あ、ちょっと待ってて！」

急いで部屋へ戻ってベルトを手にする。玄関へ戻って二人に見せびらかした。

「今年のプレゼント！ お前らは？」

「おお！ 俺もそれ！」

「いいなあ。俺はそれをサンタさんに頼んだんだけど、開けたらデシカメンソードでさあ」

「うっわマジかよ！ おま、それめっちゃ高いんだぜ！」

「え、そうなんだ？」

「秋人、僕の貸してあげるからさ、宿題済ませたら三人で電王プレイしようよ」

「おう！」

「将司も秋人も、家で宿題しない？ 僕、もう熱下がったから大丈夫」

「わかった！ ダッシュで帰って母さんに言って来る！」

そのあと、ママが帰って来てもしかばらくは遊んでいた。最初は怒っていたママだったけれど、最後には一緒に笑って僕らを見ていた。「やだ、もう。おばさんまで電王見たくなっちゃったじゃないの」なんて。それで将司や秋人に「とつくにテレビは終わってるよ」と突っ込まれていた。

「今朝のうちに見せてくれたらよかったのに」

っていう夕飯どきのママの言葉には、

「ともだちとポーズ決めたところを見せたかったんだもん」

ってごまかした。だって、サンタさんとの約束だもの。遅刻して来た、っていう話。

ナイショにしておく気になったのは、ママがいなかったせいで用意し損ねた、サンタさんへのお礼のクッキーや紅茶の代わり。

「ママはサンタさんからプレゼントをもらえた？」

そうきいたら、寂しそうな笑い顔になって、僕までちょっと悲しくなった。

Daddy's Santa Claus

十二月二十八日。多くの会社が御用納めにあたる、年末最後の勤務の日。

正午で年末の挨拶回りを終える予定だったのに。約束の時間より十分以上も過ぎている。俺は依子と待ち合わせている喫茶店を目指し、小走りで先ゆく道を急いだ。

三年ぶりに彼女の声を聞いたのは、一週間前のオフィスで取った電話を介してのことだった。

《私。依子です》

そのひと言に心臓が跳ねる。そんなことは彼女にプロポーズをした十数年ぶりのことだった。

『どうした。職場に電話なんて初めてじゃないか』

鼓動が高鳴ったのは一瞬のこと。共働きだった彼女は、主婦の割には仕事とプライベートの区別を心得ている女だった。その彼女が私用で電話をして来るということは。

『子供達に何かあったのか？』

問い掛ける声が、震えていた。

《う……ん、あ、でも、そんな一大事ではないのだけれど》

どうも歯切れが悪い。いつもの彼女らしくない。

『待ち合わせて話す方がよければ、早めに仕事を切り上げるが、どうする？』

少しの期待と、予想の大部分を占める子供達に関する最悪の事態を交えた問いに、彼女は慌てて用件を語り始めた。

《ううん、いいの。あのね、こんなこと今更お願いするのは勝手がいいと解っているのだけれど》

夢人が学校で喧嘩をし、依子が担任から呼び出されたそう。その帰り道で電話をかけて来ているらしい。

原因は、“サンタクロースの正体”についての意見の相違とのことだった。

《あの子、サンタクロースなんか本当はいない、って言い張ったんですって。パパがサンタの正体だ、って。四年生って、まだサンタクロースを信じている子も意外と多いみたいのね。私には、解らないの。男の子は男親の方が解るだろう、って、あの子へのプレゼント選びをあなたに任せきりでこれまで来たから》

喧嘩の原因を問い質した担任に、夢人は

『僕は嘘なんか言っていない。嘘をつくのは悪いこと、って先生いつも言うじゃないか』

と泣いて意見したそうさ。

『パパがいなくなってから、僕のサンタは僕のことを解ってくれなくなっただ』

と。それを聞いた依子は、申し訳なくてまともに夢人の顔を見れるまで家にも帰れない、と声を震わせた。

『あなたに子供達を取られたくなかったの。だから会わせないなんて言っちゃったの。……ごめんなさい』

——夢人のプレゼントを選んでやって欲しい。

彼女は何度もためらいがちに言葉を区切りながら、ようやくそのひと言を告げてくれた。

『喜んで。ただひとつだけ、こっちも頼みごとを聞いてはもらえないだろうか』

緊張のあまりビジネス用語になってしまう。まだ一応夫の立場でいるはずなのに。

『……届けさせてくれないか。昔のように、サンタの姿でこっそりと。あの窓から』

嫌いで別れたわけじゃない。すれ違いの生活が互いを少し疲れさせただけだ。彼女がそれを認めないまま出て行こうとしたから、俺が代わりに出ただけだ。いつか解ってくれる日が来ると信じて。

ほんの少しの期待と、大部分の諦めの気持ち。長い時間、そのふ

たつが自分の中で行き来した。

《ありがとう。……子供部屋の窓の鍵を開けておくわ》

サンタ役の願いは叶ったが、もうひとつの願いが叶えられないまま依子の方から通話が切られた。

「悪い、二十分も遅れた」

上がる息を抑えながら、どうにか謝罪の言葉を告げる。

「そっちは営業職だもの。私も戸締り当番で少し遅れて来たから気にしないで」

それに、ここで待つのは意外と平気。そう言った彼女の唇が柔らかな弧を描いてみせた。

「大学時代を思い出してたの。あの頃も、いつもあなた、こうやって遅れて来たのよね。今度はどんな文句を言ってやろうか、って……いっつもこの席で考えてた」

あの頃と同じくガラス張りの向こうに佇む、飾られたケヤキの街路樹を眺めて彼女が言う。その横顔は今も変わらず、俺を見惚れさせるほどの魅力を保っていた。

しばらくの無言、ウェイトレスへのオーダーのあと、横顔ばかり見せていた彼女がこちらに視線を戻した。

「夢人ね、すっごく喜んでた。まだまだ子供ね。何だっけ。仮面ライダー、電王？ 友達と偶然おそろいだっけ。みんなで変身シーンを披露してくれたわ」

柔らかに握った拳を口許に寄せてくつくつと笑う。彼女のそんな仕草も、自分をときめかせる仕草のひとつで。

「そうか。よかった。まだまだ俺の勘も鈍ってないな」

そう言ってしらはくれた。

理女には何を、と問えば、まだ保育園児の癖に化粧セットを選んだという。

「もっと綺麗な理女になれば、パパが帰って来てくれるかも、って」
ママになんか負けないんだから、って、相変わらず私をライバル視をしている。依子はそう言って、また口許に手を添えて小さく笑った。

喉許までせり上がる。電話を手にしては飲み下してしまう、ひと言が。

——もう一度、やり直そう。

三年という歳月が、今日もそのひと言を飲み込ませた。
笑って過ごせているなら、それでいい。父親として必要ならば、いつでもこうして頼ればいい。依子への気持ちとは別の意味で、比べようがないほど子供達のこと愛しているから。

目の前にコーヒーが置かれ店員が去ると、妙な沈黙が気まずい雰囲気にさせた。

「ねえ」

言葉を必死で探していた俺に、彼女の方から語り掛けた。

「ん？」

「うん……」

どうにも彼女らしくない。滑舌のよいはつきりとした負けず嫌いな話し方が彼女の魅力のひとつなのに。

「その、ね。……いい人、出来た？」

手にしたカップがちゃんとうるさい音を立てた。何だ、なるほど。それは言いづらい訳だ。

「隅に置けないな。坂口か？ ああ、それとも葦崎かな」

彼女にプロポーズをして玉碎した先輩や同期の独身達を思い出す。三年前まで家族ぐるみでアウトドアサークルの延長みたいなことをしていたのだから、きつと今も彼女は子供達を連れて、彼らとも交流を続けているのだろう。俺は到底行く気になれず、連絡さえしなくなっただが。

「……何の話？」

依子の顔が途端に鬼の形相に変わり、右の眉尻が不自然に引き攣れた。これは、まずい。何を怒らせるようなことをしたんだろう、俺は。

「質問したのは、私なの」

ああ、そういうことかと納得する。女の割に理論派の彼女らしい怒りの原因だと苦笑いがこぼれた。

「残念ながら、そんな浮いた話はまだないよ。でも、お前にそういう人が出来たんなら、もうそろそろ潮時かな」

恰好つけるな馬鹿野郎。もうひとりの俺がそう叫ぶ。離れて初めて気がついた。一緒に暮らせる幸福が、いつの間にかそうとも思わず当たり前前に馴染んでしまったことの愚かしさ。

「お前達を守る男が出来たんなら、潔く判を押すよ。届を送ってくれたら、俺が提出しておく」

「ばかっ！」

という怒声と同時に、視界が水の中にあるような世界になった。

「つ……べたいなっ。何するんだ、いきなりっ」

ようやく温まり掛けた体が、依子のぶっちゃけたグラスの氷水でまた冷える。周囲から刺される痛い視線に耐えかね、ポケットから取り出したハンカチで顔全体を覆って拭う振りをした。

「相変わらず勝手に早合点して、一体私のどこ見てるのよ！」

ほら、と突き出された左手の薬指で光るモノに、初めて俺は気がついた。

「何で気がつかないのよ！ 何度も口許に手を寄せてたのに！」

「……目、しか……見てなかった……」

笑うと艶っぽくなるその目が、俺はすごく好きだから。

「ば……っ、ばかじゃないの。小皺が目立って来てることに対する嫌味？」

怒った声の割には、愛しいその瞳が潤^めんでいる。年甲斐もなく、甘酸っぱいものがこみ上げて来て、思わずコーヒーへ手が伸びた。

「ほら、これっ」

彼女が乱暴にバッグから取り出したそれは、俺の結婚指輪と二通の封筒。散々悩んだ挙句、彼女の母性優先を信じ、まずは封筒を手にとった。

『サンタさんへ』

プレゼントをありがとう。

きょ年もおとしも、僕のおねがいがかかわなかったから、悪い子になっちゃったのかと思いました。

どうしても欲しいプレゼントがあります。

サンタさんへ今の内に言っておきます。今度はわすれないでください。

来年のクリスマスには、パパといっしょにいられるように、パパをプレゼントしてください。夢人』

手紙を持つ手が震えてしまう。次の手紙をなかなか広げられず、余計に焦ってもどかしい。

『サンタさん』

プリキュアのメイクポーチ ありがとう

ママにも プレゼント ください。

ねてるとき パパのなまえをよんでいます。

パパを ください。 りおん』

クソ恥ずかしさに顔を伏せる。ふたつの手紙を握りしめる俺の頭上に、もどかしそうな声が降る。

「……そういう、ことよっ。だから、その……」

——意地を張って、ごめんなさい。勝手だけど、でも、お願い。

「……帰って来て、パパ」

頬に触れた彼女の左手が涙を拭っていく。触れることさえ嫌がったのに。くすぐるように指先でなぞっていく。

「パパのアパートへ荷物を取りに行って、それから、二人で帰りま

しょう」

俺は子供がよくするような――夢人が感極まる時によく見せた、首を何度も縦に振る恰好で彼女の気持ちを受けとった。

M e n ' s S a n t a C l a u s

今度の正月は四人で迎えることが出来る。そう思うと嬉しくて、一年の垢落としにも精が出る。この三年の寂しい諸々をすべて綺麗に落とさなくては。

「ほら、夢人。逃げないで。ちゃんと背中も洗ってやる」

すっかりおしゃまになった理女は、もう俺と風呂には入らないらしい。

『パパ、えっちい』

という言葉には、冗談抜きで涙が出た。

「ねえ、お父さんのところにはサンタさん、来てくれた？」

思わず彼の背を流す手が止まる。初めて“パパ”ではなく“お父さん”と呼ばれてしまった。

「おう。それもとびきりカワイイ、修行中の、子供のサンタクロースだった」

いつの間にか大きくなっていた背をまた流しながらそう答えた。

「僕よりかわいいと思った？」

「お前と理女は別格だ」

「べっかく？」

「特別、って意味。比べられた方は、常にお前達に蹴落とされる」
少し照れ臭かったのだが、この三年分の思いをまとめて夢人に押しつけた。

「解るか？ 特別の別に、格上の格って書くんだ。格上ってのはだな」

「うん、もういいよ、それは。聞いてる方が恥ずかしいからさ、コバナレしてよ、もうそろそろ」

なんて、きつとそれは依子の受け売りだろう。発音が微妙におかしいところを見ると、意味をきつと解ってない。息子の成長を間近に見る。そんな当たり前のことが当たり前じゃない、と教えてくれ

たのは。

（夢人、俺のサンタクロースはお前だよ）

喧嘩して、涙を流させ、申し訳なかったと思うけど。その事件が依子と再び会わせてくれた。夢人がくれた、目に見えない何よりの贈りもの。

「あ、そんでさっきの話だけど」

と夢人がサンタの話に戻したので、俺のそんな感傷もまたしばしお預けになった。

「やっぱ本当なんだ。サンタさんって本当はたくさんいるんだ、って話」

それは依子と示し合わせた話。サンタクロース協会のサイトを見せて、大勢のサンタが集まる集会写真の画像を見せた。あの時のキラキラした子供達の瞳は、生涯忘れやしないだろう。

夢人は「信じる人にしか見えないって本当なんだね」と言って、クリスマスの出来事を話してくれた。

「そうか。夢人のところに来てくれたのは、“意外と”若いサンタだったのか」

「でもさ、来年のクリスマスプレゼント、僕焦っちゃってもう頼んじやったんだよね。どうしよう」

しらばっくれて聞いてみる。

「どうしよう、って、もう要らなくなったのか？ 何をサンタに頼んだんだ？」

口ごもる。もう半分大人なのだな、としみじみ十歳という年齢を思う。甘えたい、けれど恥ずかしい。夢人の中に、そんな思春期の始めを見た。

「じゃあ、そのプレゼントがもしもらえたら、ママへのプレゼントと交換してもらう、ってのはどうだ？ ママには、夢人の欲しいものを来年サンタに頼んでもらえばいいじゃないか」

「ナイス！ さすがパパ！」

もう“パパ”に戻っているし。まったく、難しい年頃だ。こっそり笑いを噛み殺す。

「そういえばさ、サンタがいるかいなか、ってクラスで喧嘩になったんだけどね。その時、石山が言ってたんだ」

——『サンタがママにキスをした』って歌、あれはお父さんを指してるんだぜ、だって。

「パパは、どう思う？」

振り返る夢人の笑みは、大人顔負けの含みを持っていた。

「ママ、ずっと怒っていたんだよ。ちよっとおばあちゃんちで泊まってこらしめようとしただけなのに、パパったら本当に出て行ったり帰って来ないんだから、って」

ねえ、意地っ張りってなあに、と知っていながら訊く夢人の意地の悪さは、絶対依子譲りだと思うんだ。

「……来年のプレゼントは、ママに願ってもらうんじゃなく、サンタのお任せコースに変える、って言いたいんだな？」

うんっ、という元気な声は、遠い昔の自分が発したそれとよく似たやんちゃなものだった。

僕は知っている。サンタクロースの正体が、本当はパパなんだ、っていうことを。

いつも理女に取られちゃうパパなんだけど、この日だけは、プレゼントを見るときだけは、パパは僕のこともちゃあんと見てくれる、僕のパパでもあるって思えるんだ。

石山が、言っていた。

『サンタの正体がばれた、っていうのがばれると、もうプレゼントもらえないんだぜ』

って。

それはちよっといやだから。

でももし。本当にサンタさんがいるのなら。目に見えないものをおねがいしたい。

（どうかパパが今度のクリスマスまでに、サンタさんの正体を僕が知っているってことを忘れちゃいますように）

窓の外、空に向かっておねがいする。今度のクリスマスまで、毎日まいにちおねがいしよう。だってもしかしてもしかすると、信じる子だけのところへサンタさんが来てくれるかも知れないんだから。

それが、僕の今年一番最初に決めた『今年のハウフ』っていうやつになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195j/>

目に見えない贈りもの

2010年10月8日15時13分発行